〈書評〉

永野善子編著

『植民地近代性の国際比較―アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験―』

鈴木伸隆（筑波大学人文社会系）

本書は，神奈川大学人文学研究所の5年間にわたる共同研究の成果をまとめた叢書である。10の論文から構成され，執筆者の専門も歴史学，人類学，経済史，国際関係，地域研究と幅広く，かつ対象地域も東アジア（沖縄，台湾，朝鮮，日本），東南アジア（フィリピン，マレーシア，タイ），アフリカ（サハラ以南），ラテンアメリカと多岐に及ぶ。序に述べられているように，植民地近代性（colonial modernity）という概念は1990年代に，アメリカでの東アジア史研究で導入され，その後歴史学研究に大きな影響を与えてきた。とりわけ朝鮮史研究の領域では，近代的民族史観をめぐる激しい論争へと発展した。20年以上経過した今日でも，植民地近代性あるいはcolonial modernityと名の付く書籍刊行は，増加の一途を辿る。

植民地近代性という概念は，従来個別に措定されていた植民地性（coloniality）と近代性（modernity）が接合されたものと考えられる。両者は一般的に対立あるいは非連続する概念と捉えられがちだが，植民地近代性は暴力や搾取を内包する植民地状況下においても，一定の近代発展の余地があるという併存性や重層性に注視する。それゆえ，問題関心は被支配社会において，誰にとっての近代性か，それは一体どのように歴史的に経験されるのか，という点に向けられる。

具体的に述べれば，10の論文はそれぞれ，植民者側の知識人・行政官（泉水論文），左翼エリート（尹論文），評論家・思想家（永野論文），タガログ語短編小説作家（岡田論文），地方華人エリート（村井論文），地方社会エリート（高城論文），小農民（菅原論文），非識字者（中林論文），東アフリカ諸社会のエリートと大衆（小馬論文），独立運動指導者（後藤論文）の果たした役割に注目し，彼らを媒介にした戦前・戦後の植民地状況下での近代性の現出とその限界性を捕捉しようとする。従来，支配者や植民地体制へのコラボレーター（連携者）と同一視されてきた，一元的なエリート像も批判的に考察し，新たな視座を提示しようとする意欲が感じられる。

10の論文の概要については，編著者永野が序で簡潔にまとめているので割愛したい。ここでは特筆すべき点として，以下の三つについて言及したい。まず一つ目は，植民地近代性の性格である。例えば，エリートにみる歴史経験からは，支配と隣合わせの植民地状況が「希望をどんどん成就させる千載一隅の好機」（23頁）や「自己解放のエネルギーにつながる」（67頁）と，肯定的かつ主体的に解釈されるなど，自己変革の契機と同一視される。しかしその一方で，スクウォッター再定住事業で主導的な役割を果たした地方華人エリート（135頁）のように，植民地政府が期待した通りに行動するわけでもない。また「植民地近代を享受した人々」（123頁）は，当の植民地支配そのものに対して，批判的精神を胚胎するなど，植民地近代性に内在する複雑性が浮かび上がる。尹（50頁）や後藤（304頁）が指摘する植民地性と近代性にみる相互浸透性が，ローカルな次元では，多様な応答として顕在化していることが確認できる。

二つ目は国際比較の視点である。日本において，植民地近代性は主に朝鮮史研究において活発な議論がなされてきたが，その分析概念が有する潜在的可能性にも関わらず，他地域の植民地研究

への影響は限定的であった。本書は植民地近代性をより開かれた議論の俎上に載せることで，多元的な実相，すなわち植民地近代性の否定的・肯定的作用，さらにその両義性が及ぼす被支配社会への断絶や乖離状況を浮き彫りにしている。

三つ目は，タイを研究対象にすることの意義である。高城・菅原両論文は，厳密な意味で植民地近代でも西洋近代でもない，近代性のありようを示唆する。しかし国家制度の地方への浸透過程には，地方エリートが媒介者として存在するなど，植民地近代性と共通する構図が浮かび上がる。両論文が含意するのは，20 世紀タイは植民地支配を経験しなくとも，西洋や日本からの近代化の影響を受けており，その引力圏から逃れられなかったという事実である。他の論文が植民地状況に内在する近代性を対象化するのに対して，両論文は帝国による植民地性がタイの近代性に浸透せざるを得ない歴史状況に注目すると同時に，近代性に内在する植民地性を析出しているといえるだろう。その意味で，極めて問題提起的である。

以上のことから判断しても，植民地近代性に対する多元性を視野に入れた本書は，時宜を得た研究成果である。研究対象の裾野をグローバルに拡大し，「植民地近代性のありようについての実証的考察」（12 頁）を通して，その概念の当否も含め植民地近代性のもつ潜在性を析出しようという問題関心が，10 の論文全てに共有されている。とりわけ中林・小馬両論文は，アフリカという文脈から植民地近代性を照射している点で大変興味深く，アジアやラテンアメリカの議論を補完していることも，本書の特色の一つとなっている。管見の限りでは，これほど幅広い地域を射程に入れた植民地近代性論はない。その意味でも植民地研究の前進に大きく寄与する一冊である。今後，学会誌等で本書が取り上げられ，植民地研究，歴史学研究，さらには地域研究の文脈で活発に論議されることを期待するものである。